

授業の質を高めるには

理事 小澤 秀子

フィンランドの教育に熱い視線が注がれている。フィンランドが、経済競争力で連続世界一と評価される一方、昨年 12 月には OECD の国際学力到達度調査で「読解力」をはじめ科学・数学の基礎能力、さらに「問題解決能力」などでトップあるいはトップに近い成績を収めたからである。そして同じ調査で順位を落とした日本では、「ゆとり教育」や学校 5 日制による授業時間の短縮に批判が集中している。

しかし、フィンランドの教育事情に詳しい専門家等の報告を総合すると、フィンランドが生徒の学力を向上させたのは、授業時間の長さでも教科のつめ込み授業でもないことがわかる。フィンランドの授業は、日常生活の課題から出発することを重視するなどの「**社会・構成主義的学習理論**」に基づいて編成され、それを「**高度の資質と自主性を持った教員**」が教えるという。そのため授業は楽しく、子どもたちは絶対に休まないそうだ。子どもたちが集中する質の高い授業だからこそ、少ない授業数でも学力をつけることができているのである。そんな授業を増やしたいものだ。

私たちは、授業に臨む生徒たちが一人残らず意欲的に集中する授業を実現したいと考えて長年努力してきた。私たちが提唱しているのは、授業の主体を生徒とすること、つまり生徒を受け身にしないで能動的に活動させることである。生徒自身の生活と関連する事実や疑問を生徒自身がはっきり持って、そのことについて調べたり考察したりして自分の頭を使って結論を導き出す、そういう生徒主体の活動こそ質の高い授業だと考えている。経験では、三つの条件がこうした授業を可能にすると思う。

第一：教材を準備すること。生徒自身が調べたり、観察したり、現象を作り出したりするためのバラエティに富んだ教材の準備である。学習には図書室やインターネットを利用する以外にも、シミュレータ教材、映像教材、また活動のヒントとなるガイド教材など、さまざまな教材が必要である。これらの開発には教師と教材開発の専門家との協力が不可欠である。

第二：活動は 3, 4 人グループの協同作業とすること。グループで活動することによって他人との協同やコミュニケーションの方法を学ぶことになり、それが学ぶことへの意欲を育てるからである。

第三：質の高い教師が指導にあたること。生徒が自らの課題を自覚すること、その課題にグループで取り組むこと、これらを確実にするには、教師の指導が不可欠である。しかし、その指導はあくまで生徒の援助としての指導である。

今から 30 年以上も前になるが、私はある先輩教師が行う授業を見て、目からうろこが落ちた思いを経験した。それは理科の授業で、生徒たちは 3, 4 人ずつのグループに別れ、いろいろな教材を使って「電気とは何か」を探求するという授業であった。先輩教師は生徒の間を回りながら、一人一人に対してきめ細かく指導していた。結果を教えるのではなく、生徒のつまずきをすばやく見つけて、その原因を取り除くための学習行動を指示するということであった。教師の何気ない問いかけによって、生徒がどんどん探究に集中していく様子が見えてとれた。生徒の集中に教師の一言がいかに重要か、教師の鋭い生徒観察とタイミングの良いヒントが、いかに生徒を生き生きとさせるか実感した。

こうした経験から私は、教員教育と教材開発とを同時に行う新しい機関が必要だと思っている。

JADEC ニュース 66 号 (2005/3) より